

精神遅滞児とそのきょうだいの相互作用に関する事例的検討

—二卵性双生児の遊び場面における相互作用の分析—

京 林 由季子*・井 田 範 美**

本研究では、精神発達遅滞児とその同年齢の健常きょうだい（二卵性双生児）の遊び場面における相互作用の特徴について検討した。対象事例は幼児期後期段階のきょうだいである。そして、家庭において3つの遊び場面—①3者自由場面（きょうだいと母親）②2者自由場面（きょうだいのみ）③2者課題場面（きょうだいのみ）—を設定しその相互作用を観察した。その結果、2者課題場面を除いて、精神遅滞児とそのきょうだいの間の相互作用に極端な非対称性は見られなかった。しかし、健常きょうだいは、その働きかける行動及び応答行動から相互作用において優位であると考えられた。母親の存在はきょうだい間の相互作用を促進するものではなく、また、その相互作用において双生児であることの特異性は特には見られなかった。

キー・ワード：精神遅滞児 きょうだい 相互作用 二卵性双生児

I. はじめに

障害児の家族において、きょうだいは障害を持つきょうだいと共に成長し、その年涯を通じてずっと関わっていくと存在となり得る。障害児とそのきょうだいの相互への影響は見逃せないものがある。

これまで、このきょうだいの一人が障害がある場合の関係については、臨床上の経験などから徐々に関心がもたれてはいたものの（Terevino, 1979¹⁴； Andersson, 1988⁹； など）、きょうだいの関わり、すなわち相互作用について検討してあるものは少ない。実際に、健常きょうだいは障害を持つきょうだいに対してどのように関わっているのだろうか。また、それに対して障害を持つきょうだいはどのように応答しているのだろうか。

精神遅滞児とそのきょうだいの相互作用につ

いては、近年、健常児同士のきょうだいの相互作用の研究から広げられつつあるものである。

Abramovitch, Stanhope (1987²⁰)の研究では、ダウン症児は働きかける行動が少なく模倣の多いこと、健常きょうだいの年齢が相互作用に影響すること等を報告している。Stoneman, Brody, Davis (1987¹²)、Brody, Stoneman, Davis (1991⁴)は、障害児とその健常きょうだいの相互作用の観察から、健常きょうだいは監督者の役割が多く、その相互作用は役割のより強調された非対称性により特徴づけられると述べている。

ところで、京林・井田 (1990⁸)； 1991⁹)は、精神遅滞児とそのきょうだいの相互作用を特徴づける重要な要因としてきょうだいの年齢を取り上げ、それを発達の視点から検討することを試みている。即ち、年齢と共にきょうだい間の発達の開きが大きくなっていく中で、きょうだいは精神遅滞児に対しどのように関わり方を変え、それがその相互作用にどのように反映され

*心身障害学研究科（現・東京成徳短期大学）

**心身障害学系

変化（発達）していくのか、という観点からいくつかの事例を検討してきた。その結果、学齢前期前までの間ですでに、その相互作用の機能における非対称性が明確に現れてくること、逆に、健常児同士のきょうだいでは、相互作用は次第に対称的になっていくことが推察されている。

今回は、これまでの事例とは異なり、精神遅滞児とそのきょうだいの関係としては特殊な例であるが、幼児期後期段階の同年齢（二卵性双生児）であるダウン症児とその健常きょうだいの相互作用の特徴について検討する。双生児の場合、年齢はもちろん同じであるが、その生活経験も原則的に同じと考えてよいであろう。従って、ある意味では純粋に両者の発達の開きとその相互作用を特徴付けることになるのであろうか。あるいはまた、双生児独特の相互作用の様相があるのであろうか。

そこで、本研究では、同年齢（二卵性双生児）であるダウン症児とそのきょうだいの相互作用の特徴について、遊び場面を通して考察することを目的とする。その際、以下の3つの場面による比較・検討を行う。

- (1) きょうだいのみの2者場面
- (2) きょうだいと母親の3者場面
- (3) きょうだいにダウン症児を教えることを指示する課題場面

II. 方 法

1. 対象事例

- ・ 幼児期後期段階の同年齢のきょうだい
（二卵性双生児）

O 児 中度精神発達遅滞児 5：03歳（男児）

S 児 健常児 5：03歳（女児）

両親は、S 児の方が先に生まれたため S 児を姉として考えているが、“おねえさん”といった呼称は使用していない。きょうだい同士も名前では呼び合っている。

N 児は、0 歳時より現在まで T 大学での早期教育プログラムに参加している。また、同時に 0 歳より 2 歳まで M 通園施設に週 1 回の母子通

園、2 歳より現在まで S 通園施設に通園している。身辺処理は、排便や衣服の着脱で若干の介助を必要とするがほぼ自立している。ことばは、簡単な指示の理解はあり、1 語文～2 語文程度の会話はできるが発音が不明瞭なため聞き取れないことも多い。

S 児は、3 歳で保育園に入り、4 歳より現在の幼稚園に通園している。

O 児と S 児は同年齢ではあるが、身体発育及び精神発達の両面ともに発達の開きが明らかになってきている。

2. 観察方法

(1) 遊び場面の設定

観察場面として、以下の3つの遊び場面を設定した。

- ① F3 場面：3 者（きょうだいと母親）自由場面
- ② F2 場面：3 者（きょうだいのみ）自由場面
- ③ T2 場面：2 者（きょうだいのみ）課題場面

場所は対象児の家庭の1室を使用し、遊具は観察者が持参した。F3、F2 場面ではミニチュアの人形と家のセット（LEGO 社製デュプロ）および色付き円柱（モンテッソーリ）を用いた。T2 場面では10ピースの積木で構成される汽車（カワイ楽器）を用いた。

(2) 観察手続き

対象児の家庭を観察者が1週間～2週間の間隔で3回訪問し、約45～60分間のVTR撮影を行った。

- ① F3 場面では、母親に「きょうだいが撮影に慣れるまで10分ほど一緒に遊んでいて下さい」とだけ指示した。② F2 場面では遊具を提示するだけできょうだいに特に指示は与えなかった。
- ③ T2 場面では、まず、O 児のいない所で S 児に母親が積木の汽車の作り方を教えた。そして、S 児に「O ちゃんに汽車の作り方を教えてあげて下さい」との指示を与え、きょうだいのみにし、汽車ができる度に「もう一度やって下さい」と要求し3回繰り返すまで観察を行った。

3. 分析方法

上記の手続きにより収集された録画資料より、F2、F3 場面については各遊び場面の導入か

ら10分間を分析場面として選択した。T2 場面については3回の課題の繰り返しの合計7分間を分析場面とした。F3、F2 場面は各2場面、T2 場面は1場面が選択された。各分析場面について2秒間隔のインターバル・レコーディング法によりきょうだいそれぞれについて相手に働きかけた行動 (Initiative 行動；以下、I 行動) と応答行動 (Responsive 行動；以下、R 行動) を相互作用の行動として取り出した。そして、その機能について行動の機能のカテゴリー (Table 1) に従い分類した。このカテゴリーは、相手に働きかける強さのレベルの点から先行研究で作成されたもの (京林・井田, 1990⁸⁾) に修正を加えたものである。尚、相手に働きかける意図はないが、相手に関心を向ける (見る、接近する) 行動も幼児では特徴的であったことから、相互作用の行動の機能のカテゴリーに加えてある。

また、I 行動は「A. 提示・演示」「B. 要求」「C. 強要」を「意図的 I 行動」として、「D. 関心」「他. その他」「U. 無意図」を「無意図的 I 行動」として分類した。R 行動については、「a.

肯定的応答」「b. 否定的応答」を「R 行動 (応答)」として、「c. 無反応」を「R 行動 (無反応)」として分類した。

F2 場面の25%についての2名の評定者による一致率は87.5%であった。

III. 結 果

1. 相互作用の行動の平均出現率

① F3 場面における相互作用の行動の平均出現率は44.8%、② F2 場面では33.3%、③ T2 場面では79.0%であった。

T2 場面では、S 児に O 児に「教える」という課題を与えてあるため、きょうだい間の相互作用は当然頻繁に行われることになり、F3、F2 場面に比べるとおよそ2倍の出現率となっている

2. 全相互作用の行動における I 行動と R 行動の割合 (Fig. 1)

① F3 場面では、全相互作用の行動における O 児の「意図的 I 行動」は10.4%、「無意図的 I 行動」は29.7%であり、S 児では「意図的 I 行動」が21.4%、「無意図的 I 行動」が39.8%であった。このように、S 児から O 児への働きかけがより

Table 1 行動の機能のカテゴリー

I 行動 (働きかける行動)	
A. 提示・演示	相手の注意を喚起するもの。示す、説明する。
B. 要求	相手に何らかの行動を求めるもの。物を差し出す、質問する。
C. 強要	強引に自分の要求を通そうとするもの。相手の身体及び遊具への直接的操作。物を取り上げる、ひっぱる。
D. 関心	相手の行動に関心を示すもの。相手を見続ける、接近する。
他. その他	上記以外の相手に働きかける行動。援助する、など。
U. 無意図	相手への働きかけを意図してないが、結果的に相手の行動を引き起こしているもの

R 行動 (応答行動)	
a. 肯定的応答	これは、以下の2つのサブカテゴリーに分けられる。
1. 積極的応答	相手の行動を受容しつつ、自分からも積極的に働きかけるもの。積極的な承諾を示すもの。
2. 消極的応答	相手の行動を受容しているが、自分から働きかけることはしないもの。見る、なされるままにしている。
b. 否定的応答	相手の行動に拒否、抵抗を示すもの。怒る、泣く。
c. 無反応	相手の行動に気づかないか、無視しているもの

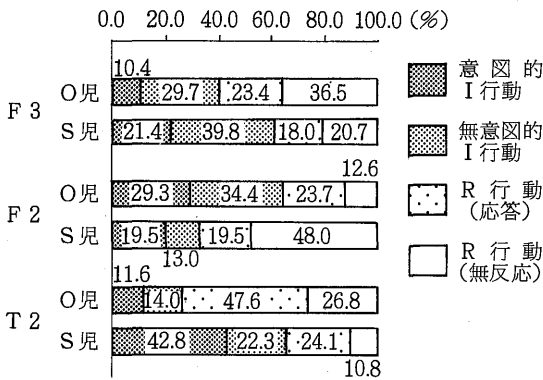


Fig. 1 全相互作用的行動における I 行動と R 行動の割合

多くなされてはいるものの、その多くは「無意図的 I 行動」であった。

② F2 場面では、O 児については「無意図的 I 行動」の占める割合が 34.4% と最も高いが、「意図的 I 行動」も 29.3% と高い割合で出現していた。S 児では、「意図的 I 行動」が 19.5%、「無意図的 I 行動」も 13.0% であり、S 児の I 行動は O 児よりもかなり低い出現率であった。逆に、S 児では「R 行動（無反応）」の占める割合が 48.0% と非常に高いのが特徴的であった。この場面では、O 児から S 児への働きかけがかなり多く行われてはいるが、受け手である S 児は「無反応」であることが多く、その意図が伝えられないことが多かったと言える。

③ T2 場面では、O 児の「意図的 I 行動」「無意図的 I 行動」はともに 11.6% と 14.0% と低い割合であったが、S 児では「意図的 I 行動」の割合が 42.8% と非常に高い割合であった。また、O 児の「R 行動（応答）」の割合が S 児に比べて 47.6% と非常に高くなっている点も特徴的である。従って、この場面では、S 児から O 児への 1 方向的な働きかけが多く行われているが、O 児も S 児の働きかけによく応答していることがわかる。

3. 相互作用的行動の機能

1) I 行動における各機能の割合

O 児、S 児それぞれの I 行動における各機能の割合を見てみると、

① F3 場面 (Fig. 2) では、O 児、S 児ともに「D. 関心」の占める割合（それぞれ、42.6% と 55.8%）が非常に高いことが分かる。また、O 児では「U. 無意図」の割合が（31.5%）と S 児（6.7%）に比べ高い点が指摘できるが、その他では、両者に特に大きな違いは見られなかった。

② F2 場面 (Fig. 3) では、O 児では「D. 関心」（49.2%）の占める割合が S 児（30.8%）に比べて高く、また、S 児では「A. 提示・演示」（32.3%）と「C. 強要」（12.3%）が O 児（それぞれ 19.8%、3.2%）に比べて高い割合を占めている点で違いが見られる。

③ T2 場面 (Fig. 4) では、O 児では「B. 要求」「D. 関心」「U. 無意図」がそれぞれ 26.2%、28.6%、26.2% とほぼ同じ割合で出現しているが、S 児では「A. 提示・演示」が 39.8% とかなり高い割合を占めている。また、「D. 関心」（27.8%）の割合は O 児同様高いが、「U. 無意図」は 1.9% とほとんどみられない。

2) R 行動における各機能の割合

意図的 I 行動（「A. 提示」「B. 要求」「C. 強要」）のみに対する O 児、S 児それぞれの R 行動の各機能の割合であるが、

① F3 場面 (Fig. 5) では、最も高い割合を占めていたのは、O 児では「a2. 消極的応答」で 36.2%、S 児では「a1. 積極的応答」「a2. 消極的応答」でそれぞれ 30.0% であった。また、「b. 否定的応答」は、O 児、S 児ともにそれぞれ、15.5% と 16.7%、「c. 無反応」はそれぞれ 24.2% と 23.3% であった。

② F2 場面 (Fig. 6) では、O 児では「b. 否定的応答」の割合が 30.8% と最も高くなっていた。S 児では、「c. 無反応」の占める割合が 60.3% と O 児に比べ極端に高い点が特徴的で、次いで、「b. 否定的応答」が 20.7%、「a2. 消極的応答」が 13.8% であった。「a1. 積極的応答」は 5.2% と O 児（17.9%）よりもかなり低い割合であった。このように、F2 場面では両者の R 行動に大きな違いが見られた。

③ T2 場面では (Fig. 7)、O 児、S 児ともに「a1. 積極的応答」の割合が最も高く、それぞれ

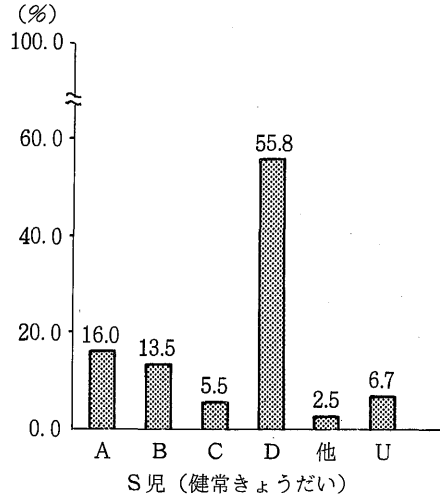
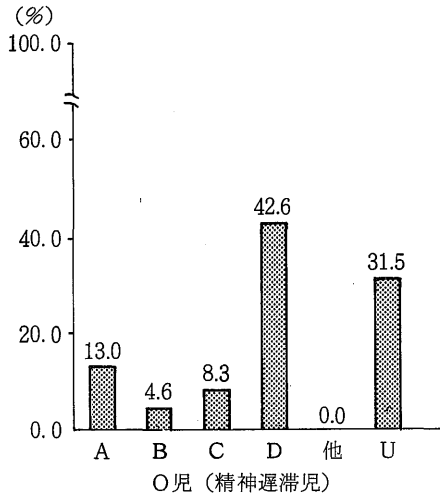


Fig. 2 I 行動における各機能の割合 (F3場面)

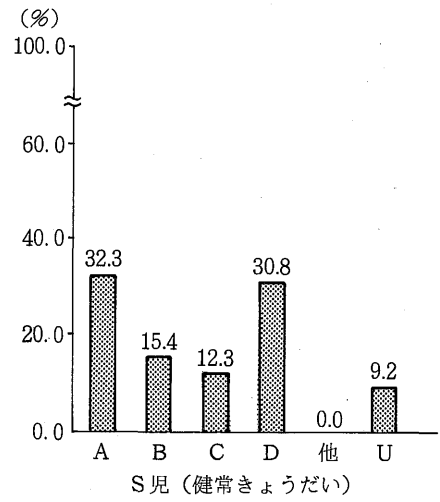
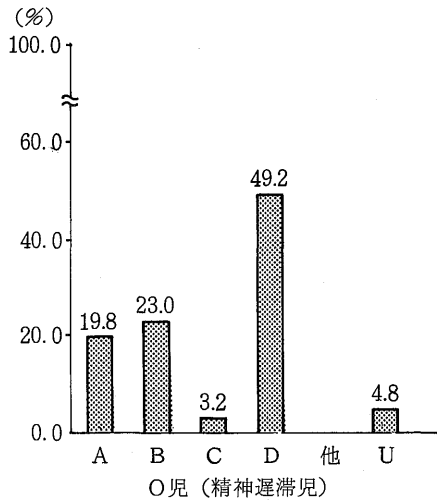


Fig. 3 I 行動における各機能の割合 (F2場面)

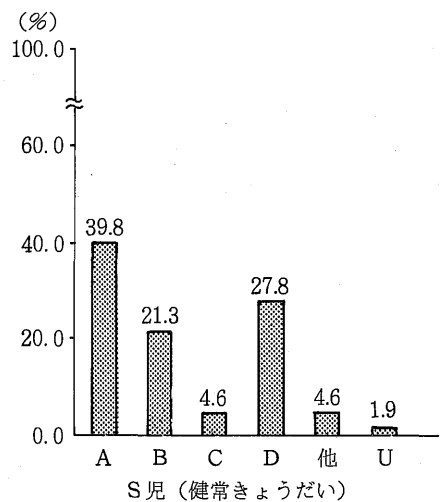
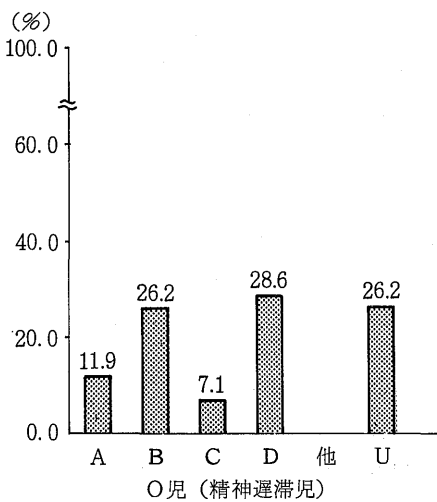


Fig. 4 I 行動における各機能の割合 (T2場面)

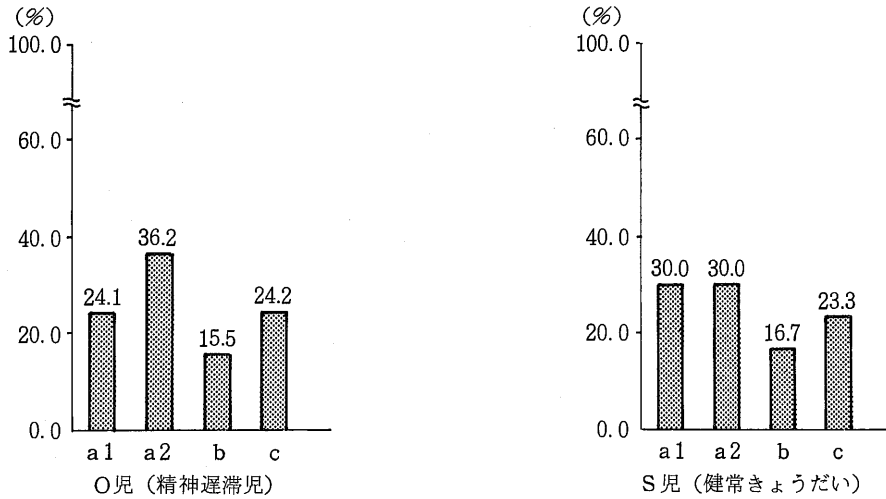


Fig. 5 意図的 I 行動に対する R 行動の各機能の割合 (F3場面)

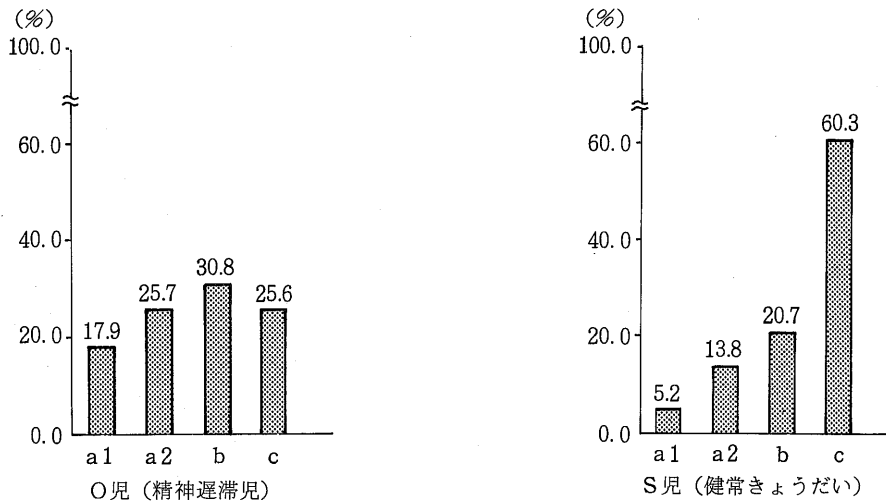


Fig. 6 意図的 I 行動に対する R 行動の各機能の割合 (F2場面)

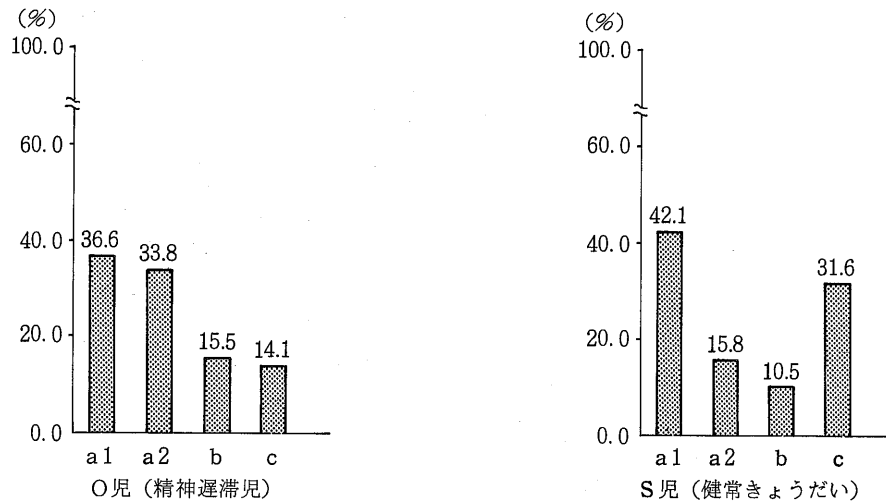


Fig. 7 意図的 I 行動に対する R 行動の各機能の割合 (T2場面)

36.6%と42.1%を占めていた。また、O児では「a2. 消極的応答」が33.8%とS児の15.8%よりも高く、S児では「c. 無反応」が31.6%とO児の14.1%よりも高い点でやや違いが見られた。

IV. 考 察

各場面におけるきょうだい間の相互作用の特徴は以下のようにまとめられる。

① F3場面では、S児からO児への働きかけがより多くなされてはいたものの、意図的働きかけは少ない。また、S児、O児のI行動及びR行動の機能の割合はほぼ同様のパターンを示している。

この場面では、母親の働きかけはO児の遊びのレベルに合わせて行われ、O児に向けられることが非常に多かった。また、O児の「これ」「これは？」などの働きかけも母親に向けられることが多かった。そのため、母親—O児の強い2者関係に対してS児がそのやりとり注目するあるいは反応する場面が多くなっていると言える。O児のI行動において「U. 無意図」の割合が高くなっているのはそのためである。

特に幼児期では、母親の働きかけはきょうだいを結びつけるように機能するが(大内, 1990¹⁰⁾、本事例のように母親の援助が一方に偏り過ぎることはかえってきょうだいの関わりを減少させてしまうものであるかもしれない。

② F2場面では、O児からS児への意図的働きかけがより多くなされていたが、受け手であるS児は無反応であることが多い。

これには、O児からS児への働きかけが明確でなかったことが1つには上げられる。つまり、だまって手を伸ばしている(ちょうだい)などのO児の働きかけにS児が気づかなかったと言う場合である。しかし、それ以上に、S児がO児の働きかけを明らかに無視している場合が多く見受けられた。この場面では、S児はO児に遊具を少し分け与えてから別々に遊んでいた。これは、S児とO児の遊びのレベルが違ってきているため、この場面では、S児にとってO児

は遊び相手としてはあまり魅力のない存在であったのではないだろうか。そして、S児の側にO児と関わろうとする意志がなかったため、O児への働きかけも少なく、また、O児の働きかけに応答もしなかったと考えられる。

③ T2場面は、S児にO児に“教える”ことを指示した場面であった。従って、相互作用の出現率は高く、また、S児からO児への1方向的な強い働きかけと積極的応答がなされていた。従って、この場面では、その相互作用において非対称性がみられる。また、O児もS児に対して積極的に応答している点で、単に一方通行では終わっていない働きかけであることがわかる。このことから、S児は指示されればO児に“教える”という役割を受け持つことができると言えよう。しかし、その教え方は、「ここ、ここ」「そこじゃない」などの単純な指示の繰り返しや、ことばやジェスチャーのみのことも多く、十分にO児に手がかりを与えているとは言い難い。

以上から、幼児期後期段階の精神遅滞児O児とその同年齢のきょうだいS児の相互作用において、2者課題場面を除いては、S児からO児への1方向的な強い働きかけとなるような相互作用の極端な非対称性は認められなかった。これは、幼児期後期段階の精神遅滞児とその年下のきょうだいにおいて得られた結果(京林・井田, 1991⁹⁾)とほぼ同じである。

しかし、S児の意図的I行動における「A. 提示・演示」の割合の高さ、及び特にF2場面での「C. 強要」の割合の高さは幼児期後期段階、学齢前期段階のきょうだいにおいても指摘されており(京林・井田, 1990⁹⁾; 1991⁹⁾)、精神遅滞児に対してきょうだいの働きかけの強さを示す1つの特徴と言える。さらに、R行動においても、S児はO児と関わろうとするかどうかによりその応答行動を変えていることから、その相互作用においては優位な立場にあるということはできよう。しかし、F2場面とT2場面での働きかけ方の違いに示されるように、S児はO児に対して指示されれば“教える”という役割を何

とか受け持つことができても、遊びの中で自発的に“教える（S児が先生役になってO児と遊ぶ）”ことはできない段階である。そのために、その相互作用における非対称性は明確には現れていないものと考えられる。

このように、本事例では、特に同年齢（二卵性双生児）のきょうだいであることの特異性は示されず、その相互作用の特徴は健常きょうだいの年齢に関係することが示唆された。即ち、Stoneman Brody, Davis (1987¹²⁾)、Brody, Stoneman, Davis (1991³⁾) が指摘するような健常きょうだいが監督者、教師の役割を受け持つ関係になるには、健常きょうだいの年齢がその役割取得能力の発達(木下, 1977a⁶⁾; 1977b⁷⁾) との関連で重要になってくるのではないかと考えられる。

また、母親の存在は必ずしもきょうだい間の相互作用を促進するものではないことが示唆された。

文 献

- 1) Abramovitch, R., Corter, C., & Lando, B. (1979): Sibling interaction in the home. *Child Development*, 50, 997-1003.
- 2) Abramovitch, R., & Stanhope, L., et al. (1987): The influence of down's syndrome on sibling interaction. *J. Child Psychology and Psychiatry*, Vol.28, No.6, 865-879.
- 3) Andersson, e. (1988): Siblings of Mentally Handicapped Childeren and Their Social Relations. *British J. Special Education*, Vol.15. No.1, 24-26.
- 4) Brody, G. H., Stoneman, Z., & Davis, C. H. (1991): Observations of the Role Relations and Behavior Between Older Children With Mental Retardation and Their Younger Siblings *A. J. M. R.*, Vol. 95, No.5, 527-536.
- 5) 後藤秀爾・鈴木靖恵・佐藤昌子 (1982): 重度・重複障害幼児の集団療育(3)—健常児きょうだいの発達課題—。名古屋大学教育学部紀要 Vol.29, 205-214.
- 6) 木下芳子 (1977a): 役割取得能力の発達(一) 児童心理, Vol.31, No.9, 187-208.
- 7) 木下芳子 (1977b): 役割取得能力の発達(二) 児童心理, Vol.31, No.10, 169-195.
- 8) 京林由季子・井田範美 (1990): 障害児とそのきょうだいの関わりに関する研究—精神遅滞児とそのきょうだいの遊び場面における相互作用—。児童育成研究, Vol.8, 3-18. 日本児童育成学会.
- 9) 京林由季子・井田範美 (1991): 精神遅滞児とそのきょうだいの相互作用に関する事例的検討(2)—幼児期後段階のきょうだいの遊び場面から—。日本特殊教育学会第29回大会発表論文集, 192-193. 日本特殊教育学会.
- 10) 大内みちこ (1990): 幼児初期のきょうだいの関わりに関連する母親の働きかけと子どもの月齢. 発達の心理学と医学, Vol.1, No.2, 225-233.
- 11) Stoneman, Z., Brody, G. H., & Abbott, D. (1983): In-Home Observations of Young Down Syndrome: Children with Their Mothers and Fathers. *A. J. M. D.*, Vol.87, No.6, 591-600.
- 12) Stoneman, Z., Brody, G. H., & Davis, C. H. (1987): Mentally Retarded Children and Their Older Same-Sex Siblings: Naturalistic In-Home Observations. *A. J. M. R.*, Vol.92, No.3, 290-298.
- 13) Sutton-Smith, B. (1982): Framing the Problem. In Lamb, E. M., Sutton-smith, B. (Ed.) *Sibling Relationships*. Hillsdale.
- 14) Trevino, F. (1979): Siblings of handicapped children: identifying those at risk. *Social Casework*, 60(8), 488-493.

**A Case Study of the Sibling Interaction
between a Mentally Retarded Child
and a Non-Handicapped Sibling :
Analysis of the Sibling Interaction
between Identical Twins during Toy Play**

Yukiko KYOBAYASHI and Noriyoshi IDA

The purpose of this study was to analyze the sibling interaction between a mentally retarded child (male) and a same-age non-handicapped sibling (female) during toy play. They were identical twins and 5 years of age. Home observations of the sibling interactions were done with three conditions of toy play-① triad-free (siblings and their mother) ② dyad-free (siblings) ③ dyad-tasked (siblings)-.

The interaction between a mentally retarded child and a same-age non-handicapped sibling were not accentuated asymmetries except dyad-tasked condition. But non-handicapped sibling was shown to be more dominant because of her initiative behavior and responsive behavior. It was not seemed that mother's presence promoted the sibling interaction, and that there were some effects of identical twins in it.

Key Words : mentally retarded child, sibling, interaction, identical twins